

日本福祉教育・ボランティア学習学会 学会ニュース

Japan Academic Association of Socio-education and Service Learning

No.86

2025年

3月21日発行

発行人：野尻紀恵 編集委員：熊谷紀良 松山 毅 梅澤 稔

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町 1F

[事務局：全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)] Eメール jimukyoku@jaass.jp

第30回とうきょう大会を振り返って

大会事務局長 **菱沼幹男** (日本社会事業大学)



第30回とうきょう大会は、202名の参加者に加え、本学の学生スタッフ約80名、さらには、清瀬市内6カ所の福祉事業所等にもご参加いただき、盛会裏に終わることができました。心よりお礼申し上げます。

本学で本学会の大会を開催するのは、4回目となります。第1回設立大会は、1995年10月29日に「福祉教育・ボランティア学習の研究と学会活動のあり方を探る」を大会テーマとして開催されました。当時、私は大学卒業後2年目の社協職員であり、実行委員の一人として参加し、準備段階から熱い議論が交わされていたことを今でもはっきりと覚えています。その後、1996年に第2回大会、2014年に第20回大会、そして2024年に第30回大会の会場校となり、節目となる大会の運営を担う重責を感じながら、実行委員会のメンバーとともに大会プログラムを練り上げていきました。

とうきょう大会の大会テーマは「究める 拡がる 福祉教育・ボランティア学習 ～気づきの連鎖が織りなす排除なき共生社会へ」であり、今日の厳しい国内外の状況を直視したうえで、福祉教育・ボランティア学習によって排除のない共生社会に向かっていきたいという思いを込めて、とうきょう企画として2本の特別課題研究、4本のワークショップを実施しました。実行委員の問題意識から取りあげるテーマを絞り、内容を検討する過程においては、そのテーマに対して本学会がどのような研究を積み重ねてきたのかをしっかりとレビューすること、そして今日的課題と結びつけて議論していくことを重視しました。大会準備のプロセス自体が学会としての力を鍛えていく場となることを感じる時間でもありました。

また、学会企画としての「ふく・ボラサロン」では、新たな試みとして学会の会長経験者をホストとしたワールドカフェ形式のワークショップが行われ、大会前日には、学会ネットワーク委員会企画ワークショップが全社協を会場として行われました。それぞれとうきょう大会に厚みをもたらしていただいたことに感謝申し上げます。

一方、私自身は大会準備期間中に脳梗塞を再発し、大事な時期に入院を繰り返し、実行委員の皆様には大変なご迷惑をおかけしてしまいました。心よりお詫び申し上げます。それでも支障なく大会を開催できたのは、4名の同僚のフォローと実行委員メンバーの着実な準備のおかげであり、この場をお借りして頼もしい仲間から感謝申し上げます。

混迷する現代社会において、個々の人々が互いを理解し協力し合う人間として生き、次世代につながる社会を築いていけるかが問われており、本学会が大切にしていることには、大きな意義があると感じています。10年後の第40回大会に向けて、そして希望の持てる未来に向かって、本学会とともに生きていきたいと思えます。皆様、お互い体に気をつけましょう。

ふく・ボラサロン(学会企画)**11月23日(土) 10:00~12:30**

第30回とうきょう大会において5回目のふくボラサロンを開催した。今回のふくボラサロンも、世代や領域を超えた参加者31名が、一堂に集い、福祉教育・ボランティア学習実践/研究への関心を高め、研究や実践に関わる人とは日頃悩んでいることを共有する、出会い、語り合うことを目的に企画した。

プログラムの内容としては、30周年を記念し、「福祉教育・ボランティア学習を語ろう」と題して、福祉教育・ボランティア学習のこれまでとこれからについて意見交換を行った。意見交換のファシリテーターは、本学会会長経験をおもちの上野谷会員、原田会員、松岡会員の3名にお願いした。3名のファシリテートにより、参加者同士が、福祉教育・ボランティア学習に関わる思いや話題を持ち寄り、その意義や価値、課題や夢をともに語り合う魅力的なプログラムとなった。(文責：小林 洋司)

ワークショップ(とうきょう企画)**11月23日(土) 10:00~12:30**

①コロナ禍を経た学生ボランティアを地域に紡ぐ支援のあり方・支援者の役割を問う

本ワークショップは、大学や社会福祉協議会のボランティアセンター等が行うボランティア体験学習プログラムを通じ、学生の体験による学びを地域実践に紡ごうとする実践者の方々と共に、コロナ禍を経た現在、求められる支援者の役割について検討することを目的に開催された。前半は、世話人より本学会における「若者のボランティア体験学習に関わる30年の研究動向」と共に、『大学ボランティアセンターにおけるアフターコロナのボランティア相談実態とプログラム開発』『ボランティア体験学習を通じた若者の成長と支援者の役割』『学生を地域につなぐ体験による学びを支える地域実践のプラットフォーム機能』について報告がなされた。後半は、「若者を地域貢献活動に紡ぐボランティア体験学習の方法」「ボランティア体験学習を実践に紡ぐ担い手の役割」をテーマに、グループ及び全体でディスカッションが実施され、参加した学部生・院生も積極的に議論に加わった。(文責：川田 虎男)

②考えてみよう！災害時の課題を繰り返さないために必要な取組みとは ～取組みの壁を乗り越えるために何を学び深めるのか～

本ワークショップは、災害時の課題がわかっているにもかかわらず繰り返されるのか、日々の防災活動や福祉教育の取組みに不足するものは何かを深掘りすることを目的に開催された。世話人から「被災地で繰り返される課題」や「平時の活動の参考事例」「障害など当事者とともに取組む防災活動」などの話題提起のあと4つのグループに分かれ、メンバーが関心を持った課題からまさしく深掘りした議論が活発に交わされた。日々の防災活動の中でも災害支援を限定化し矮小化していることへの懸念から災害支援の捉えなおしの必要性や、当事者とともに活動を行うためには、相手のことをより深く知るなど地道な下準備や基盤づくり、支援の効果をより広める取組みなど、防災という切り口だけではない日ごろの福祉教育が必要であると、これまで重要とされてきたことに、新たな視点として加えられた方向性が各グループから示され、新鮮な気づきを得たワークショップとなった。(文責：北川 進)

③表現豊かな対話を通じて、福祉教育・ボランティア学習をカタチにしてみる

本ワークショップでは、LEGO®SERIOUS PLAY®メソッドと教材を活用し、ブロックを使った作品作りや作品を使った対話を行い、福祉教育・ボランティア学習をカタチにすることに挑戦をした。ワークショップ開始から笑い声が各グループから聞こえ、久しぶりにレゴに触れながら、思い思いに作品を作っていた。具体的には、「相互理解」というお題からレゴを組立て、完成した作品からお題にかかわる作品のポイントをそれぞれ説明するといった流れで行った。

参加者の感想では、「新しい視点が見えた」「相手の意見を知れる」「自分に気づいていないことを引き出してもらえる」などがあげられた。作品を通じて対話することが、話しやすさにつながり、理解が深まりやすくなること、作品を制作する過程で、潜在的な部分が表現されることがあり、言いよどみながら、感じ取ることができるのではないだろうか。福祉教育・ボランティア学習の場でこのメソッドの可能性を感じるワークショップとなった。(文責：梅澤 稔)

④『ふくしえほん』を小中高校生へつなげよう

「ふくしえほん・あいとぴあ」の実績と課題提起を受けてグループワーク→分かち合い→まとめを行った。グループ編成は次の通りだった。①小4プログラム「ゴミの問題って？」5名、②高校生プログラム「未来のためにできること」6名、③保護者プログラム6名、④車椅子体験プログラム改訂6名、⑤いろんな「すき」があってもいい5名、⑥福祉教育検討委員会の創設6名、⑦ジェンダー平等4名。参加者の感想を紹介する。「第2グループ内で出していた高校生への指導を考える場面の話し合いで、メルカリなど若者世代の新たなニュースについての提案が出ていて、それへのグループ内の反響が大きかった。この案を出したのは学生だったが、大学生の目線と現職の専門的な目線では違いがあることを知り、時代に合わせた政策を考えるという点において、若者世代の提案は大きな価値があることに気づけた。時間が不足気味だったが、多彩で魅力的な提案揃いだった。アイデアが「あいとぴあ」改訂の参考にされると伝えただけか、高揚感が保たれた。(文責：田村 真広)

基調講演

11月23日(土) 14:00~14:30

野尻紀恵会長より「混迷する社会における福祉教育・ボランティア学習」と題して基調講演が行われた。冒頭、「福祉教育・ボランティア学習」の原点として、神戸市長田区にある女子高校で教員をしていた時に被災した阪神淡路大震災での教え子たちのことが話された。ふだんは教員に悪態をついてくる生徒らが、自らも被災したにもかかわらず、率先して避難所の高齢者の話し相手をしたり子どもと遊んだり、水くみを買って出たりする光景を目の当りにしたという。ある人が変容する、出会う、出直すという本学会が大事にしていることとつながっていると話されたことが印象的であった。

また今回、本学会30周年を記念し『究める 福祉教育・ボランティア学習の課題』（研究編）、『拡がるふくしの学び』（実践編）が刊行されたことに触れて、本学会が積み上げてきた研究と実践を今後さらに深くつなぐことに注力していく決意が力強く語られた。基調講演を受けて、ますます混迷を深める今の時代こそ、「福祉教育・ボランティア学習」の持つ意味、果たす役割は少なくないと感じた。(文責：原田 康信)

①障害者差別解消に向けた当事者発信の『今』

—何を、誰に、どのように発信して、どのような未来を目指すか—

本課題別研究では、誰もが発信者・受け手となる今、障害者差別解消に向けた当事者発信の重要性を考えるために、俳優&ダンサーとして活動している車椅子ユーザーの森田かずよ氏、保健医療の当事者の語りをインタビュー動画で記録しその動画をウェブで公開する DIPEx Japan 副理事長の瀬戸山陽子氏、視覚障害の当事者として地域の小中学校等における講演活動に取り組む茂手木寛子氏がそれぞれの立場から話題提供を行った。そのなかで、当事者と他者との双方向の理解が大切であり、一方的な発信にならないよう、他者と協働しながら発信することの大切さや、当事者一人ひとりの違いに価値があり、その体験の語りから一人ではないと知恵と勇気を得る人がいることの重要性が語られた。

会場からの様々な質問に答えたのち、大部氏から「登壇者は様々な経験を、発信する自己への理解に繋げていた。対話的な発信の後の受容や研鑽が、気づきの連鎖となる」とまとめがあった。(文責: 疋田 恵子)

②『内なる優生思想』と向き合う ~気づきと対話をいかにつむぐか~

特別課題研究2では、私たちの中に潜在的にはたらいっている「内なる優生思想」の生成の要因を探り、気づきと対話を通じた「内なる優生思想」からの解放への糸口を見出すことを目的とした。金貴粉氏(国立ハンセン病資料館学芸員)からは国によるハンセン病施策の歴史とハンセン病療養所での患者の暮らしについて報告され、石渡和実氏(東洋英和女学院大学名誉教授(やまゆり園事件検証委員会委員長))は「青い芝の会」や津久井やまゆり園事件などから浮かび上がる「役に立つ命・役に立たない命」、当事者の意思決定支援など、橋田慈子氏(千葉大学教育学部教育学教室助教)からは「女性障害者ネットワーク」の当事者からの聞き取りから、「障害者」であり「女性」であることから二重の困難さなどをご報告いただいた。それぞれの報告から通底する問題を踏まえ、後半は、フロアから多くの質問が寄せられ、登壇者が答える形でパネルディスカッションを行い、活発な議論がなされた。(文責: 宮脇 文恵)

① SDGs 運動を組みなおす実践論の探求

~居場所・プラットフォームづくりに注目して~

最終年のまとめとして、本課題別研究会で協議されてきた内容に基づく2題の報告が行われた。報告1「SDGs 運動を組みなおす福祉教育・ボランティア学習の可能性」では、諏訪徹会員(日本大学)より、SDGs をめぐる課題と福祉教育・ボランティア学習のもつ可能性が、ESD・いのちの持続性という価値枠との関連の中で論じられた。報告2「SDGs 運動を組みなおす福祉教育・ボランティア学習実践の観点」では、後藤聡美会員(神戸大学)より、異なる複数の型を有する実践が連動することの意義が示された。

その後の全体討議では、研究会メンバーからのコメントを交差させながら、SDGs(運動)の批判的検討、および、福祉教育・ボランティア学習との接合点や両者の関係性が議論された。本課題別研究の到達点が確認されたものの、多くの課題が残っている。それらを引き受けつつ、まとめの作業と次の研究課題に着手する準備を進めていきたい。(文責: 後藤 聡美)

② 『社会福祉・介護福祉検定』のレリバンスーその2ー

はじめに、世話人代表の矢幅清司会員（淑徳大学）から、「高校福祉教育の歴史的背景」について、主に福祉系高校を中心に説明があった。続いて、真田龍一会員（東奥学園高等学校）が、全国福祉高等学校長会加盟校における主な取組を紹介した。その後、出沢秀子会員（山梨県立大学）が、検定実務に携わる教員4名を対象に行った質問紙調査をKJ法で分析した結果を報告。検定が「福祉系高校生の学びやキャリアに確かな関連性を持つ」など評価できる一方で、「合格が進路実現に直結しない」などといった課題も明らかになった。さらに、茶木正幸会員（名古屋市立西陵高等学校）、中山見知子会員（群馬県立吾妻中央高等学校）、高木諒会員（愛知県立古知野高等学校）が、検定を通じた各校での取組や教員の所感について報告を行った。後半のフロアディスカッションでは、検定の価値や福祉教育の裾野を広げるための具体的な提案についてなど、活発な議論が交わされた。（文責：高木 諒）

③ インクルーシブボランティア：『誰もが参加できる』を目指して ー実践知は理論を生み出せるかー

「インクルーシブボランティア」とは、年齢や国籍、病気、障害の有無等にかかわらず、活動したい誰もが合理的配慮のもと、その人にあった多様な形で参加ができるボランティア活動を指す。特にコミュニケーションが苦手な人間関係構築に困難を抱える人は活動に結びつきにくい。

そこで第1回目となる本研究では、コメンテーターに妻鹿ふみ子会員を迎え、実践に資する理論を生み出していくために、まず前半は参加者の共通理解として、①大阪ボランティア協会・永井美佳会員がこれまでの取り組みやスタンスを確認し、②DDAC 発達障害をもつ大人の会・広野ゆい氏による当事者の視点での報告、③関西福祉科学大学・南多恵子会員による先行研究についての報告をいただいた。

その上で後半は、本テーマを多面的に捉えるため、参加者によるグループワークを実施し今後の視点・論点について議論した。議論では、社会へ発信や、事例による検証、対象の拡大、活動（参加）の場づくり、現行制度との整理など、当事者の視点、多様な意見があった。

今後はこれらの意見を参考にしながら、枠組みをつくり研究を進めていきたい。（文責：岩本 裕子）

自由研究発表

11月5日（日） 9:00～12:00

第1分科会 学校・高等学校を中心とした展開/海外の動向などの報告

第1分科会では、①坂本晃一会員（墨田区立菊川小学校）「インクルーシブ教育による発達障害児と在籍学級児童の変容の考察～担任による福祉教育と専門教員による特別支援教育アプローチ法を組み合わせる～」、②楠聖伸会員（武蔵野大学）他「学校における福祉教育プログラムの目的設定に関するチェックリストの提案」、③大滝修会員（東京経済大学）「高校生が社会人と分かち合う社会 design の実践研究～agency と generativity の sharing community の醸成」、④齊藤ゆか会員（神奈川大学）「ドイツにおける社会教育福祉学的な青少年育成～子ども・若者の貧困を中心として～」の4本の報告があった。

①と②は、学校における福祉教育の内容をどのように深めていくか、③は、高校生のエージェンシーを高めるうえで社会人との協同が持つ意味の考察、④は、ドイツにおける社会教育福祉学的な観点からの青少年アプローチというそれぞれの問題意識から報告がなされた。

いずれの報告も臨床の現場での福祉教育実践を考える上での示唆を与える報告であった。

（文責：梶野 光信）

第2分科会 実践プログラム・評価に関する報告/大学を中心とした展開

本分科会では5つの演題が報告された。「語り」の協創がもたらす意義と可能性—パブリックスティグマ回避の観点から—（松本すみ子会員）、「知的障害児（者）との交流経験の種類と知的障害児（者）のイメージの関連—保育科学生の施設実習前後における調査から—」（長谷中崇志会員）、「社会福祉施設が認識する施設での介護等体験の意義」（丸岡稔典会員）、「大学におけるボランティアコーディネーターの専門性～市民教育の場としての地域認識とコーディネーション実践」（川田虎男会員）、「重度肢体不自由学生に対する大学の障害学生支援の実際から示唆される課題」（藤森慎太郎会員）であった。当事者や地域課題とのかかわり（語り、交流、実習、ボランティア活動）を通しての学びが、単に場や機会の提供という一方向的なものではなく、学びを提供する側、受け取る側、調整する側それぞれの立場を踏まえた双方向的な学びの可能性が改めて示唆された。福祉教育実践の中にある「学びの価値」を再認識する有益な発表と討議であった。（文責：松山 毅）

第3分科会 地域・施設・社協を中心とした展開①

第3分科会では地域・社協・福祉施設を中心とした実践に関する報告がなされた。第1報告清信大樹会員からは、高校生が地域の高齢者と関わるボランティア現場へのフィールドワークにより、ボランティア参加・継続の促進に関する研究が報告され、第2報告香山芳範会員からは、市民後見人の特性としての、地域と当事者をつなぐ役割の意義が示された。第3報告宮脇文恵会員・第4報告山西優二会員は連続報告として、逗子社協の20年間にわたる福祉教育の実践の蓄積が報告され、福祉教育とは何かという現場での問い直しの重要性が報告された。第5報告西村洋己会員からは、社協の福祉教育実践を俯瞰的にとらえながら今後の方向性が示された。

それぞれのテーマの中に、いまだ存在する専門職と住民、関心層と無関心層の二項的なとらえ方、ジェンダー規範など価値観の相違などが浮き彫りになったが、そのなかでゆらぎを経験しながらも、丁寧な対話で乗り越えていこうとする現場の思いを共有することができた。（文責：川島 ゆり子）

第4分科会 地域・施設・社協を中心とした展開②

4つの多様な視点からの発表が行われた。藤川会員は、全社協「全国福祉教育推進員研修」の効果をアンケート調査から分析し、研修が福祉教育の意義の理解や協働実践の推進という点で効果をあげる一方、実践の広域での普及や質向上には課題があることを示唆した。須田会員は、彩の国福祉教育・ボランティア学習推進員ネットワーク23年間の活動を分析し、多様な会員による相互に気づき学び合う機会を多く作ってきたことが活動継続の鍵であると報告した。岸会員は、知的障害当事者の居場所づくりの過程をインタビュー調査から分析し、活動の中に「何もない余白」があることが、ゆっくり自由な空間を生み出すことを示唆した。長澤会員は、「当事者性」の変容を生活史から分析し、他者との「差異」によって「当事者性」は生まれ、「理解してくれる他者」の介入によって深まるが、「差異性」と「同質性」の共存による複雑な深化のプロセスがあることを指摘した。（文責：大石 剛史）

2日目の最後のプログラムとして行われたのが30周年記念シンポジウムである。今回は30周年記念誌を軸として、これまで積み上げてきた30年の研究と実践の到達点を問うと共に、これからの10年すなわち近未来のあり方を展望することとし、シンポジストを外部から招くことはせず、会員どうしのクロストークによって構成した。前半は「研究編」「実践編」の編集にそれぞれかかわった諏訪会員、野川会員から、編集のプロセスで「見えてきたこと」と共に「読んでもらいたいこと」の焦点化と紹介があり、後半は、一足早く中身を読み込んだ高木会員（研究の視点）、宮本会員（実践の視点）から、「学びの本質」「当事者性への気づき」などのキーワードを提示しての、本学会の研究と実践が探求してきたことの実績や今後の方向性の議論を触発するコメントが出された。その後、フロアからの問題提起も交え、コーディネーターの小林会員、妻鹿も加わって、研究と実践を世代を超えてどう変容させていくか等、活発な議論が交わされた。参加者が、記念誌を読むことに誘われた2時間半であった。（文責：妻鹿 ふみ子）

Information

■ 学会総会について

2024年11月23日に日本社会事業大学清瀬キャンパスで開催した総会において、下記の審議・報告事項があり、すべて承認されました。

【審議事項】

- 第1号議案 2024年度 事業報告（案）
- 第2号議案 2024年度 一般会計決算（案）、監査報告
- 第3号議案 2025年度 事業計画（案）
- 第4号議案 2025年度 予算（案）
- 第5号議案 名誉会員の推挙

【報告事項】

- (1) 30周年記念事業
- (2) 選挙管理委員会の設置と委員選出
- (3) 第31回えひめ大会について
- (4) 各委員会の活動
- (5) 会員数の現状

■ 名誉会員

多年にわたり学会運営にご尽力いただきました上野谷加代子会員へ名誉会員の称号を贈りました。これまでのご功績に心より感謝申し上げます。

■ 大会発表賞受賞者

研究大会における自由研究発表の質の向上と若手研究者や実践者による研究発表の奨励を目的として、第19回研究大会（いしかわ大会）より「大会発表賞」を創設しました。

本賞の選定においては、会員である研究者または実践者のなかで「着眼点、方法、または得られた知見が独創性に富み」、かつ「発展性、将来性が期待できる」発表が選定されました。

第30回研究大会（とうきょう大会）の受賞者は、以下のとおりです。

演題「学校における福祉教育プログラムの目的設定に関するチェックリストの提案」

楠聖伸会員（武蔵野大学）、保井俊之会員（叡啓大学）、前野隆司会員（武蔵野大学）、
白坂成功会員（慶應義塾大学大学院）

■ 学会研究紀要 投稿論文の締切日程について

Vol. 45（2025年11月発行）への投稿締切は、2025年5月31日までメール送信です。
詳細は、学会ホームページの投稿規程、執筆要領、チェックリストをご確認ください。
なお、査読結果によっては、半年ずつ掲載対象の紀要が変更になることもあります。

■ 次回の大会（第31回えひめ大会）の日程について

第31回大会は、2025年11月29日（土）30日（日）に聖カタリナ大学 北条キャンパスで開催します。開催要項などの詳しいご案内は、今夏を予定しております。

● 編 集 後 記 ●

30回記念のとうきょう大会。今回の報告にあるとおり多数の研究、討論が行われました。とうきょう大会の特徴であるワークショップ・特別課題研究では、福祉教育・ボランティア学習に多様な切り口で多様な人たちが参加するきっかけとなるべく企画され、当日は、都内・近隣県から、社協、ボランティア・市民活動団体、福祉事業所、学生など一緒にワークや議論をする姿が見られました。終了後や交流会で学会会員へのお誘いをするも、魅力的な説明にはまだまだ修行の必要を感じました。大会への参加を学会への参加につなげられたら。。。声かけの方法を一層考えていきたいと思いました。（熊谷）